



YATOの郷土詩



YATOの郷土詩

目次

はじめに	004
第一章 龍の池	006
第二章 損な時代に生まれて	017
第三章 ある冬の情景	024
第四章 うちの親父のこと	032
第五章 新しい暮らしの古い習わし	039
第六章 騙すもの騙されるもの、食べられるものみんな	046
第七章 馴染んでゆく台所	053
第八章 この坂の上から	057
第九章 この谷の下から	063
第十章 流れを変える	070
ある視点1	075
第十一章 新しい人たち	076
やとのかんそく①	087
ある視点2	094
第十二章 縁はどこへ行った	099
やとのかんそく②	107
第十三章 光の池	112
おわりに	118

はじめに

私たち、500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」の活動拠点である築田寺は、東京都・町田市の忠生という場所にあります。築田寺の周りは、長い時間をかけて形成された谷状の地形から「谷戸」と呼ばれ、古くから水が集まり、それによって人々が集う場所でもありました。私たちは、谷戸という特有の地形を取り巻く環境や歴史を学び、これからの500年に向かって、今いちど人が集う場所の在り方や記録を受け渡す方法を模索しています。「500年」というスケールに驚かれるかもしれませんが、世代を遥かに超えた遠い未来に意識を置くことは、想像する力を育むことになると考えています。

私たちの活動は、忠生とその周辺に暮らす人たちに話を聞く「聞き書き」から始まりました。壮大ではないかもしれないひとりの経験を通じて見えてきたのは、生き生きとした生活の記憶であり、そしてその背景にある、大きく変化を遂げたこの地域の現代史でした。

こうして受け取ったお話を、どう記録すればよいのか。私たちは、語り手の姿をおぼろげにし、語られた時代を混在させることで、この土地が育んできた詩（うた）を浮かび上がらせることはできないかと考え、この本を「郷土詩」と名付けました。この土地に生きたひとり一人の記憶を、500年先まで受け渡していこうと模索する、ここが私たちの現在地です。

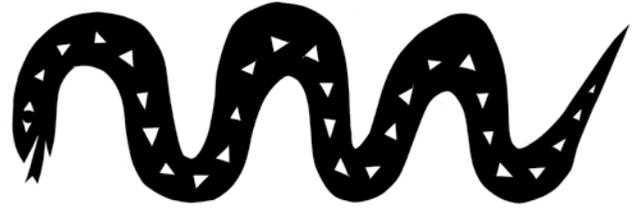
YATOプロジェクト

2022年3月21日

龍の池

第一章





むかしもむかし
おばあちゃんの おばあちゃんが まだ
こどもだった おおむかし。

村の近くの谷戸には
稲を守るキツネや
村人と仲の良いタヌキや
風をあやつるテングや
山に長く住むへびが いました。

秋になると 村人たちは
キツネやタヌキやテングやへびと一緒に
お祭りをはじめます。

あるとき 村でおかしな病気がひろがったので
村人たちはテングと相談をして

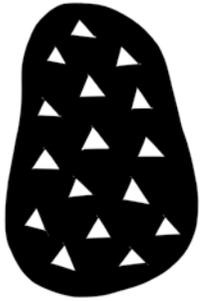


いつもより大きくてりっぱなお祭りを ひらくことにしました。
村人は お餅を持ってきました。
キツネは 笛を持ってきました。
タヌキは 太鼓を持ってきました。
テングは 灯籠を持ってきました。
へびは 手も足もないので なにも持つてくることができませんでした。

みんなが一生懸命に準備をしているのを見て
へびは なにもできないことを悔しく思っ
て涙がこぼれました。

ぼろり ぼろり ぼろり

3粒の涙は 赤と白と黒の まるいたまごに変わりました。
へびは「お祭りに持っていくものができたぞ」と喜んで
たまごをくわえて お祭りに向かいました。



畦道で 笛を吹いているキツネに会いました。
「へびしょう なにを大事にくわえているんだい？」
と たずねてきました。

口のふさがったへびは 答えることができません。
「なんで だまっているんだ。」と怒ったキツネは
へびのしっぽをつかんで ひっぱりました。
びっくりしたへびの口から 赤いたまごが落ちて
田んぼの溝にあたって 割れてしまいました。

街角で 太鼓を叩いているタヌキに会いました。
「へびやん なにを大事にくわえているの？」
と たずねてきました。

口のふさがったへびは 答えることができません。
「なんで だまっているの。」と怒ったタヌキは へびのおなかにのっかりました。
びっくりしたへびの口から 白いたまごが落ちて 井戸の中に落ちてしまいました。



参道で 光に照らされたテングと会いました。
「へびよ なにを大事にくわえておるのか？」
と たずねてきました。

口のふさがったへびは モ「モ」と口を動かしましたが
答えることができません。
「祭りだというのに 失礼なやつだ。」と怒ったテングは
扇をふって風を起こし へびを空高く飛ばしてしまいました。

飛ばされたへびの口から 黒いたまごが落ちると 中から大きな龍が生まれました。
龍が大きな雲を呼び 雨を降らすと
割れた赤いたまごは美しい池に変わり おかしな病気は消えました。
村人たちは 喜んでお祭りを楽しんでいましたが
やがて降り止まない雨に こまってしまうました。

そこへ ぐうぜん通りがかったお坊さんがお経を唱えると
龍は眠くなり 池の底でいびきをかきはじめたので

村人たちは安心して 秋を迎えることができました。
そういうわけで この村では お坊さんの忙しい時期には
龍が暴れて稲が育ち お経を唱えると 静けさが戻るようになりました。

やがてときが経ち お坊さんの忙しい時期にも 龍は出てこなくなりました。
村人たちが不思議に思っ池をのぞいてみると 龍が弱りうずくまっていた。
そして 井戸の水は枯れ 稲は育たなくなっていました。

「お祭りがあれば 龍も元気になるだろう」と 誰かがいい出しました。
村人たちはお祭りの準備をはじめますが キツネもタヌキもテングも いつのまにか姿を消して
とうとう現れることはありませんでした。

いくら祭りを続けても 龍は元気になりません。

そこへ 遠くからやってきた神さまが 天から降りてきました。

「この龍の命はもう長くない。優しく空へ送ってあげよう」
と、いつて手をかざすと 龍は静かに息を引き取りました。

すると 不思議なことに 枯れていた井戸は
勢いよく水が湧き出て 稲は次々と育ちました。

神さまはそこに居座り こともをたくさん生みました。
稲がよく売れ 村には幸せが長く続きました。

大きなお祭りも 必要なくなりました。

いっぽう 谷戸の奥では キツネやタヌキのこともは
どうしてだか とうがんばつても もう生まれることはありませんでした。

さて 井戸に落ちた白いたまごは どうなったのでしょうか。

白いたまごからは 龍のこどもが生まれ キツネやタヌキやテングたちが

谷戸の奥で 大事に育てています。

昔からいる村人は 龍のこどもに 今でもひっそりとお餅をお供えします。

谷戸から お祭りの音がときどき聴こえてくるのは そういうわけなのです。





撮影：1965年(昭和40年)



第二章

損な時代に生まれて

親

の言いなりだった、極端に言うかね。いい人がいても、見合いしたら、もうそこへ行かなきゃいけないっていう時代だったから。だから可哀想、ちよつとね。昭和20年代なら違うけども、私は昭和7年生まれだから。20年っていうとね、終戦後だからね。私たちは見合いすれば、もうね。それでまあ、お互い縁があつて結ばれて。だから、親がこの人だったらいいて思ったら、否応なしにいつちゃうつていう時代だから。

小山田から来たんです。上小山田っていつてね。カミ、上つていう字書いて。田舎です。山の中だから、凶師の方がひらけてましたね。

兄弟7人でね。女が4人で男の人が3人で。私は、上から、1、2、3、4番目です。ここに嫁に来たのは、26です。数え年ですね。昔は数えだったからね。今だったら満で25ですけどね。適齢期ですね、大体。早くもなく遅くもないっていう。

私は知らなかったけど、旦那さんになる人は、私のこと知ってたみたいで。うちの前の道を行ったり来たりしてね。私が農家やってたもんで、大根なんか洗つてるところを、なんとなしに見てみたいよ。道路があつてね、掘抜きつて井戸から、こうざーざーざー水が出てる、流しっぱなしで出てるんですよ。この人は働きもんだと

か思つたら幸いですよ。それで気に入られて。で、見合いすることになつて。

仲人さんなる人が一緒に席にいてくれて、町田の寿司屋さんで、お見合いしたんだけど。原町田。着物着てったかしらね、洋服だったかしら。ちよつと忘れちゃったけど。

お互いにね、気に入ったんでしょね。誠実そうだ、真面目そうだから。向こうも働き者みたいだからっていうことで。もう60年前の話だから恥ずかしい(笑)。そんなことあつたかしらと思う。50年ひと昔よりもっと上ですもんねえ。

まあなんにせよ、知らないところに入つてね、その人間になるんですから、覚悟がね。やっぱり嫁いだ先と実家とまた違うでしょ？ 家風に慣れるように、一生懸命努力してましたね。育つた環境も全然違うしね。うん、それは大変でしたよね。長男でしたからね。おじいさんがいて、私は孫嫁だからね、かわいがつてもらつてね。あとお義父さんお義母さんがいて、小姑が女3人いて。小姑っていうのは、旦那の妹。あと弟が1人。それで、私たち夫婦と、子供が生まれて、最高で10人でした。

昭和1桁の人だったから勤めあげたんだと思いますよ。今の人だったらとてもじゃない、勤まらない。なにしろね、父親に「お前には帰ってくるうちがないぞ」って言われてうちを後にするんですから、並大抵のことじゃないですよ。だって昔は、お正月とお盆しか、2回しかうちに帰れなかったんですよ。帰りたくたって。今だと車でスーツと帰っちゃうでしょ、1年間になん度も。だって私たちのうちにはもう他人が、兄さんの奥さんがいるんだから、帰ったついでに場所がないんですよ。だから、泣いて泣いて、辛抱して。それで、やってきたんですから。だから昭和1桁の人は覚悟が違う。私たちの年代の人はどこでもそうですけど、誰それ出て行つたとか離婚したとか、そんな時代じゃないから。離婚なんてありませんね。ただただ辛抱。親もね、それだけのことを娘に言うつてことは、大変なことだと思うよ。かわいい子供なんだから。子供も一生懸命、辛抱してね。親に心配かけたくない一心で、我慢して、夜泣いて。だって知らないうちに飛び込むですもんね。知らないことばっかしですもん。

お姑さんがすごくいい人だったんですよ、でもその代わり、2年しか一緒にいなかったんです。早く、55歳で亡くなりましたから。今の脳梗塞ですね。半身不随になっちゃったんですよ。杖ついて歩いて着物着ていたんですよ。でも、私はこへ縁があつて来たんだから、このお義母さんを大事にしてあげようと覚悟を決めてやってきました。

昔のお嫁さんは、お姑さんから呼び捨てで呼ばれてたんですよ。今みたいに何々さんと呼ばなかった時代だから。マサコならマサコって呼び捨てだった。でもお義母さんがいい人だったんで、あの、今でも泣けてきちゃう……。お義母さんのこと考えると。いい人でね、「私も世話になってるんだからね、マサコって呼べない」つて言うの。いいお義母さんでしょ？ そんなこと言わないけどね。「お嫁だから、呼び捨てで呼んでください」とお願いして。そうしたら、亡くなる少し前に、呼んでくれました。あーやつと私もこの嫁になったんだと思つて、嬉しかったです。そういうことは一生忘れません。うん。いまだに涙が出ますけど。そういうこともあつてね。

おじいちゃんはね、私が孫嫁にあたるもんでね、すごくかわいがつてくれて。昔の言葉でね、「オメエ腹減つたらうんと食えよ？」つて、よく言つてくれました。嫁だから遠慮してると思つて。百姓やつてたんですよ。この上に畑があつてね。舅しゅうとと妹と私と、子供をリアカーの上に乗つけて。お義母さんいないからね。だから、お腹すく

からよく食べなつて、遠慮しないで食べなつていう意味なんですよ。よく優しく言ってくれました。20代で若かったからね、お腹はすくんだけど、でもやっぱり嫁だから、遠慮しなくちゃって思っちゃいますよね。あと半分食べたいと思うけど、遠慮しちゃうってね、言えなかつたですよ。

ご飯はうんと大皿で出しましたね、大勢だから。おかずっていつてもね、お肉やお魚はないから。うちで採れたごぼうと人参できんぴらを作ったり、里芋と人参で煮物を作ったり、天ぷらとか、うちの材料で作ってね。本当、質素ですよ、今から比べると。あとお新香でもあればね、お味噌汁でもあればいいんじゃないですかね。何しろ9人ですから。大変ですよ、そのおかず作るって。ご飯炊くっていつても、2升3合。2食で2升3合。夜はまた炊かないとね、7、8合かしらね。それでもまだお昼に5人いますから、お弁当持ってお勤め行つても。お米は作りましたね、田んぼで。野菜から全部ね。粉もそうだしね。

一番印象に残つたのはね、お蕎麦を作るんですよ。小さい機械で粉を挽いて。夏の暑いときにね、汗をかきかきやるんですよ。一生懸命作つたのに、あつという間に食

べ終わっちゃうんですよ。そう、あれがね、嬉しいんだけど、もう、がっかりしちゃう。汗みどろでやったのにさ、あつという間にさ。美味しいからもあるんですよ。この辺りはお蕎麦をよく食べましたね。こちら辺は、うどんのことをお蕎麦って言うって。一生懸命手で作って、バーって食べちゃうと、力抜けちゃうよね。

昔はね、水道なんてないからさ、夕方になると水瓶に水をいっぱいはるんですよ。寒いときは、その水に氷が張るんです。それを割って、鉄瓶に入れてお湯を沸かして、薪でご飯を炊いて、それでご飯を食べるってことをやりました。井戸は、裏にね、ガツチャンガツチャンってやるやつがあつて。お風呂も、こう竹で作つたもので水がいくようにして、それで、薪で沸かして。なにせ電気がないんですから、水道もないし。食器洗うのも、水桶に入れて、冷たいので洗ってね。お湯が出ないからね。本当の話。考えられないですよ。私の年代の人はやってたんだよね。みんな勤めあげたの、ちゃんと。だから損な時代に生まれちゃったんだよね、ふふふ。

第三章
ある冬の情景



朝

5時の坐禅会は、本当にもう信じられないぐらいの寒さでした。今は12月の5時っていつてもそんなに寒さを感じないけれど、その頃は霜がこんな立っついて。毎回坐禅会の方が帰るときには、本堂の前で焚き火をして、お湯を沸かして、その中に卵を入れて、帰るときに冷えた身体をあたためるようにと、ゆで卵をあげて、ご苦労さまの気持ちを伝えたといい。そのときに、義母とふたりで焚き火をしながらか、戦争の話とかを聞いていた記憶があります。

今

年はだいぶ寒いですけどね、昔は田んぼに氷が張るとスケートができたんです。じゃあスケート靴はどうするんだっていうと、竹を割って作るんですよ。履いてある靴に合わせて。雪が降ると、裏山でスキーをやる。ほとんど全部山に囲まれてたんで。冬の遊びはそういうところからスタートするんです。私なんかちょうど団塊の世代ですから、子供がいっぱいいいてね。

正月はまず、どんど焼きってご存知でしょうか？ この辺は養蚕が盛んで、蚕を作

るんですね。たくさんとれるようにということだったり、無病息災を祈願して、蚕のまゆに見立ててまゆ玉を作って、1月の14日にお札や書き初めを集めて焼くという行事があったんです。それを作るのが、子供の役目だったんです。だからお正月が明けると、1日6日辺りから作り始めるんですよ。材料は、お寺にある竹だとかを組む。中に入れるものを、子供が集めて作りあげるんです。それで最後になるべく高く作る。苧木っていう大きな竹を1本立てて周りに寄せてって、立ち上げて綱を張って、学校が始まる前ぐらいまでには作りあげてしまう。この地域の、例えば山崎小、図師、小田とかどこが一番高く作るかっていうのを競い合ったような記憶があつて。あと、お札などを集めるために各家を回るとお小遣いをいただけるとすよね。子供たちはそれで勉強道具とか買って分けたりとか。そういう風な記憶がありますね。

うちは養蚕をたくさんやってたから、とにかく農家の手伝いをしなきゃいけない。昔は味噌部屋とか、馬部屋とか米つき場も全部家の中にあるんですよ。ただトイレと風呂場は別なの。不浄なもの外に、部屋の中がない。そういう生活でしたね。火を使うから別にしてたんだか知らないけど。子供るとき、留守番をするって言ってもね、帰ってくるまでにご飯炊きをして、風呂沸かしをして、遊んでる暇がないです。

でも遊びすぎちゃって、忘れちゃったなっていうときは、なんとか誤魔化そうとしてぬるい湯でも先に入っちゃって。

遊ぶ場所はたくさんあるんですよ。なぜかっていうと、田んぼやっていると田んぼ使えないけど、稲刈って田んぼがあくと田んぼが全部遊び場になるんですよ。あと神社はほとんど、お寺の境内とかもね。田んぼが一番の遊び場でしたね。

普段は常に肥後ナイフっていうのを持ってね。こうやってパッと開いてね。肥後^{ひご}守^{かみ}。いまだに持ってますけどね。なんでも加工するんで、色んなものを作るんです。簡単な、篠^かって竹の細いのがあれば両端を切って、杉鉄砲^かっていったら杉を切って。間に紙をつめて紙鉄砲、水鉄砲にするときには筒の真ん中に穴開けて。

私なんて傷だらけです、左手。これ全部切った痕。でも黙ってるんです、親には。隠れてやる。でも持たせてくれたんですよ。それに普通に文房具屋さんにナイフが売ってるんです。スズメがいるとスズメを落とそうってね、いや本当の話。こういう木の股をゴム銃^かって言うんですよ、こうつけてバーンってやるんですよ、裏山で

全部自分で作って。悪いことも先輩が全部教えてくれる。中学3年ぐらいの人がトッブになるんですよ。下は小学生から、みんな一緒に。

5、6月になると、ウナギとかフナだとか釣る場所があって、その川を止めてしまいうんですよ、田んぼに水を引くための堰^{せき}をして。堰が止まると泳げるんですよ。みんな裸で泳いでました。お父さんの手ぬぐいを借りてつけて。それから、その川でどじょう掬いをやるんですよ、そのまま。そうそう。もう、手で取って食べたり。だから我々は川があれば川にどんどんどんどん入ってって、手づかみで獲るとか掬いをやるのか。釣りをするとか。釣り道具もやっぱり全部自分で作ってましたね。

あと、駄菓子屋がありましたね、凶師に。おばあちゃんがいてね、おしゃればあさ^あんって、我々そう呼んだの。「おしゃればあさんとこ行こう」って。もうそれが楽しみで。あと行商もいっぱい来てました。街に買いに行けないから、私が大きくなるまで来てましたよ。あ、そうそう、あと紙芝居おじさんが来たの。それからアイス売りも来てた。場所も決まっててね、定期的に来た。そこでお菓子とか、飴とかを買ってね。あれは楽しみだったな。



第四章

うちの親父のこと



善夫 みんなリーダーだったよな。

幸夫 みんなそれぞれリーダーだったな。

善夫 だからみんな、すごかったのよ。

幸夫 うん、それぞれ、どんぐりの背比べでみんなやってたよ。すごい強いのがいて、俺に付いて来いみたいなのもいなかったし。

善夫 うん。

幸夫 うまくいったよな。

善夫 だから仲間外れとかそういうのはなかったな。

幸夫 いじめもなかったなあ。

善夫 結局、親がすごかったのよ。我々が喧嘩したりするとね、親がね、怒ってすごい。

親世代は戦争行ってるからね。

仁 ああ、怒ってきたな、うちの家も(笑)。

じ

いちゃんと父親は一緒に飲んでましたね。でもうちのじいちゃんは早く倒れちゃって。じいちゃんのことを父親が結構尊敬してる部分はあるけど、じいちゃんはやっぱ強いので。じいちゃんが俺を怒ったりすることもあるので、父親はあんまりそういうのは好きじゃなかったみたいです。だから、じいちゃんと父親が喧嘩するときなんかはすごいですよ。壮絶っていう。言い合いですけど。そんな感じだったかな。うちの母親が、「早く別の部屋行くよ」って、避難したのを覚えてます。

僕も最近父親と飲んでますね。こっちに帰ってくるようになって。何話していいかわかんないじゃないですか、父親と。でも、まあなんか、だんだん色んなことが話せるようになってきたような気はしますけどね。子供の話とか、おばあちゃんと母親の関係とか、そういうのも。今度はこっちに来るじゃないですか(笑)。

でも、あんまり特別っていう感じじゃないですね。ずっと一緒に暮らしてきましたからね。喧嘩もあんまりないですね。割と向こうも遠慮してるし、お互いその、あんまりそういう風にならないようにしてる感じがある。

小さい頃はもう散々怒られましたね。ありすぎてもう。火遊びとか。仏壇あるじゃないですか。そこで、お線香たくところを新聞燃やして。ちようどやっていると、外から見られていて。ほんと火は危ないですよ、魅力がありますから。

何で怒られたんだらうっていうのもありますけどね。とりあえず正座すね。今コンプライアンス的にあれですけど、結構やられましたよ。主にビンタ。グーはなかったですね、大体パーでした。今は全然ないですけど、やっぱ怖かったですよ。中学校とかそんぐらいのとき、全然反抗する気持ちも起きなかったですよ、怖くて。高校になってくるとほとんど会わなくなってくる。外の時間の方が長いので。やっぱり思い出としては中学校ぐらいまでですね。

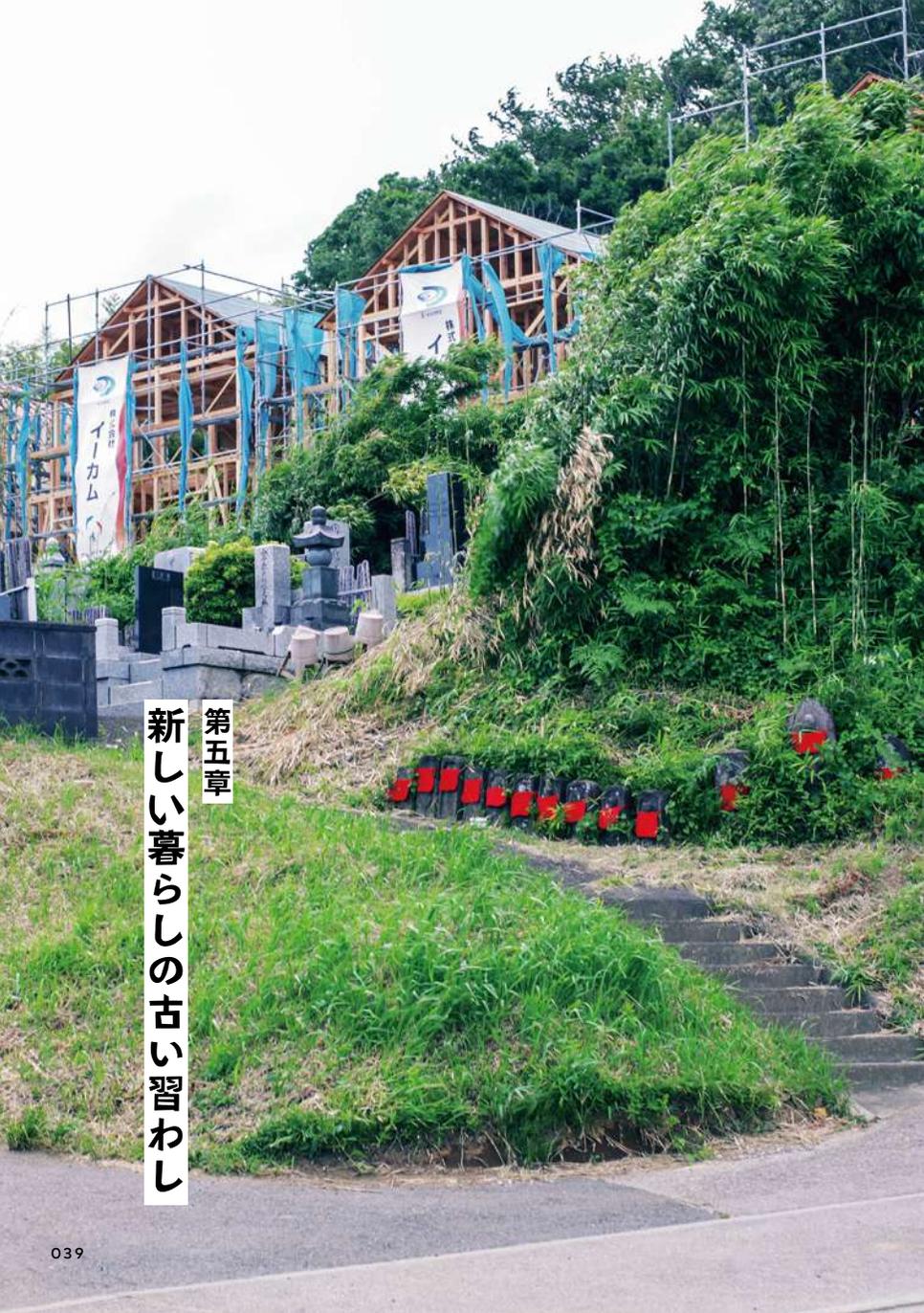
私

は百姓やってるし、主人は勤めだから、夜会うだけでも。朝お弁当持つて出かけちゃうでしょ。夜帰ってきて、会話っていつても、あんななかったねえ。いつかね、お盆に実家に帰ったんですよ。もう居心地が良くなって、母親に泣き言言って、愚痴話して。そしたらね、妹が家まで送ってくれたんですよ。そのときはね、ま

だ長男をおぶって、浴衣で縫ったおしめが荷物になって、妹がそれを持ってきて。そして玄関入ったらさ、いきなりバーンと頬を叩かれて。自分でも悪いことしたと思わないから、そのときはわからなかったの。後になって、「お前もいないし子供もないし俺ひとり寂しかったんだ」って言ってくれたから。うん、申し訳ありませんでした。まあね、仲直りできましたけど、そんなこともありましたね。

あとね、舅のおじいちゃんはね、お花が好きだったんですよ。朝起きると、お花がいくつ咲いているかよく覚えてるんです。あるとき、私が取っちゃったんですよ。それなら、「花取ったん誰だー！」って怒られて。「私を取りました」って、白状してすわれた言葉が残ってる。だからね、絶対嫁さんにはね、他人同士なんだから、余計なことはいって思っていましたよ。今私が姑だけど、言っちゃだめだなんて。絶対ね、嫁さんには言うまいと思つて。

やっぱりね、夫婦は他人の始まりっていう話。親子の方が絆が強い。私がね、夫婦だからと思っ、ちよつと気を許して言っただんすよ、あることを。もう内容は忘れたけど。お義父さんのことね。そしたら、「うちの親父はそういう親父じゃない！」って、こつ言われた。親の肩を持つてるでしょ？ 私の肩は持たないの。私はね、あつ夫婦と言えども他人だと思つた。だから、安心して人には言えないんだよね。情けないよね、夫婦でありながら。親のことをちよつと言っただけで、頭ごなしにされてさ、何にも言えないんだよ。いかに親の方が大事か。妻なんてどうでもいいんだよね。親子の方が、やっぱり血を分けた親子だから強いんでしょ？ それにしてもね、うちの中でさ、知らない人の中でたつたひとり、夫でありながらさ、安心して言いたいよね。本当嘘みたいな話でしょ？ 昭和1桁生まれだから。本当の話なんですから。みんなそうやって我慢してきたんですよ。



第五章
新しい暮らしの古い習わし

私

が来たとき、60年前はもうやってませんでしたけど、前のおじいさんがやってたみたいで。餅屋っていうんですよ、ここね、屋号が。うちは大福餅を作ってる餅屋、たれを作ってるのはたれ屋さん。屋号でわかっちゃうんですよ、家が。餅屋って言うのと1回でわかるから、地元の人だね。遠くから来た人はわかりませんけど。っていう時代で。この凶師のこの道路で、店を出して売っていらしいんですよ、市みたいになって。それでうちのおじいさんが頭だったの。

善夫 いちいち名前を呼ぶんじゃないかってね、その頃はね、やっぱり屋号だった。

幸夫 屋号屋号、そうそう。屋号だな、よっちゃん。

善夫 うん、屋号が多かったね。

幸夫 そう屋号を言えば大体どこでも、俺たちはわかるんだよ。

善夫 職業をとっての屋号が多かったね。下駄屋とか、たばこ屋とか、綿屋とか。

幸夫 鍛冶屋とかな。

善夫 うん、職業やってる家は早くその屋号がついたみたいで。本家の下が新屋しんやとか新屋にいや

とか。農家さんもほとんどある。

幸夫 そうそう。俺んとは屋号が綿屋っていうんだけど、要するに戦前戦後古綿の打ち直しをやりながら農業やってたわけだから。兼業してたから。よっちゃんとは隠居したんだな？

善夫 うん。隠居して家建ったから、あそこは隠居だったということになって。たばこを売ってたところもずっとやってた訳じゃないけど、むかーしたばこ屋をちよつとやって、もうたばこ屋だって屋号になって。

幸夫 坂の入り口にあれば坂口だとか。山の上の方にあれば上の山だとかって、そういう屋号だった。それから、同じのもあったんだよね。ここの部落に隠居っていうのがあれば、向こうの部落にも隠居っていう屋号があったり。今も通じないよな。

善夫 通じないよ。

幸夫 我々を通じるけど、我々の子供世代には通じないと思うわ。

善夫 だから、うちの嫁さんがよく言うんだけど、名前、顔、苗字を覚えるのと屋号を覚えるんだから大変だって。隠居のよっちゃんの女房ですとか。それで、それだけじゃないのよ。親父の名前を言ったりする。隠居のとっちゃんとの倅のよっちゃんですとかさ(笑)。だからね、嫁さんが覚えるのが大変だったって言ってた。

私

は昭和45年ぐらいに忠生に來たんですけれど、結婚が決まってから初めてここに連れて來られたとき、まず驚いたのは道がないこと。あつても、本当に車輪がはまっちゃうような、車も通れないような道が築田寺りょうでんの前に1本あつて、今ある大通りから來る道はなくて。本当にお寺の参道みたいなものと、町田自然幼稚園に上る道ぐらいしかなくて。そのときはなんだかすごく悲しい気持ちで、寂しくて。秋田では大通りに住んでいたのです。こういう雰囲気はあまり味わったことはなかったのです、ちょっと騙されたという感じで……(笑)。

その頃は、タヌキやらキジとか、そういう動物たちが、生活のなかで庭に現れたりして。強烈だったのはカエルでも食用ガエル、ガマカエル。子供の頭ぐらいあるようなカエルが、のっしのっしのっしって普通に生きてきて。それからこの頃は、ものすごく大きなネズミ、子猫みたいなネズミが物置にいたりとか。そういうなかで留守番のご近所のおばあちゃんがね、よく昔話の絵本に出てくるような、髪がバサバサで前の歯が1本しかないようなおばあちゃん。都会から山の中にぽんと入ったような、本当に鬱蒼としたところでした。

台所に朝から晩まで立っているんだけど、話し相手というのは、そういうわけで動物で。毎日蛇口のところの小ちやな緑ガエルが必ず現れて、台所にいる間そこにずーっといるという。そのカエルさんと話をする、「おはよう」とか、そんな感じなの。その話だけでも、静かだったんだなということが想像つくと思うんですけれど。

その後子供ができたりして、どんどん賑やかになっていくんですけど、その間の期間って3〜4年ぐらいなんだけど、今の私の振り返りでは、ものすごく長い期間に感じられるんですよ。話し相手というのは、結局子供とこの自然なんだけども。山の中に入っていくと、子供をひとりひいて、ひとりおんぶして、10分も歩かないうちに右も左もわからなくなつて、一度本当にこれで死んじゃうんじゃないかというくらい迷い方をして。この山のところなんですけれど。方向がわからないとはこういうことなんだな。子供も私も3人で泣き泣き、「お父さーん！」とか「誰かー！」とか呼んで、やっとこさなんとなく光を見つけないながらここに下りてきたという、そういう状況で。



第六章
騙すもの騙されるもの、
食べられるものみんな



農

家の方々がときどき来て話をしてくれるなかでは、「狐の嫁入り」みたいに火が出るとか、お芋を全部本当に植えたのになくなっちゃったり。それはタヌキのせいだとか、ムジナのせいだとか、動物たちが色々と犯人にされながら。

私もムジナを見たことはないのね。タヌキみたいに人を化かすんだって。あっちだよって言ってあっちに行くと全然違ったりという。私も山の中に入って、こっちなあっちかなと、うろろしたときに、なんとなく、そっちそっちという感じがするんですよ。でも行くと、そうじゃない。騙されたような気持ち。実際にそういうのがあるんだなという実体験なんだけど。本当に空から見たらわずかこころ辺でうろろしてたという。やっぱりその日はなにか、沈んでたのかな……。深く入りすぎちゃった。ちょこっと散歩のつもりで。

ウ

サギなんかもね、頻繁に出てましたね。獲って食べてました。子供たちだけだと、鳥を獲る仕掛けをしましたね。雪が降ると特に、食事どきに鳥が来るから、ある網を弓形に作ってね。藤を二重にして巻くとバネができるんですよ。それ

で弓形で真ん中に稲穂の残ったやつを置いとくんですよ。それをちょっと触るとパーンとかえると。そういったものを自分で作るんですよ。それで鳥を獲る。みんな自分で工夫して。多かったのはスズメですね。そのまま火にかけて、羽もむしらないで串焼きにして。なにもかけないで食べるんですよ。美味しいですよ。

あと、鶏や豚をみんな飼ってたんですよ。要するに自分のところで、自給自足ですからね。私見せられたんだけどね、首ちょん切ってそのまま歩いてる鶏を。よっちゃんのお父さんとかが、そうやって子供に見せるんですよ。あと、記憶にまだ残ってますけどね、確か豚のおっぱいは14個あるんですよ。でも、それ以上に生まれちゃうんですよ。だからこうやって抱いて、哺乳瓶で育ててね。大きくなったら市に出すんですよ。そんなところでバイトもしていましたね。小山田の一番奥にね、そういう取引所があったの。

あ

と俺がもう1個覚えてるのは、築田寺の山があって、今はそこにいっぱい家ができてるんだけど、その山で木切ってみんな炭を焼いてたんだよ。うちの親

父と講中の人たちで。ある日俺が学校から帰ってきたとき、みんなで鍋やっていたよ。それで、その前の日に、うちに赤い犬がいたんだよ。父ちゃん、犬いんじゃないって。俺そのまま学校行っちゃったんだよ。それで帰って来たら、犬いねえんだよ。したら、その山でみんなで犬を食っちゃった。そういう話なんだよ。でも、俺は見たんだよな、赤犬を。その山ではさ、共同で炭焼きをするために、山を伐採して、分けて、みんなで燃料にしたんだよな。昔はそれこそ自給自足だもんね、ほとんど。

昭

和54年にしぜんの国保育園ができたの。その前は幼稚園の手伝いをしながら、3才児のお給食を作っていました。そのお給食で使われるのは、今と同じように、農家の方々からもらったお野菜。その頃から食育をしていました。おばあちゃん先生、義母から聞いた、竹の皮に梅干しを入れてチューチュー吸わせるおやつとか、昔ながらのおやつというのをそこで知って。おばあちゃん先生の教育は、味覚は0歳からっていうことで、酔っぱいとか、苦いとかそういうものを全部味わわせるというのがあったので、それを実行するのが私の役割でした。

仁さんのお父さん、富門さんって呼ばれていたんですけど、その方がすごくよく昔の話をしてくれて。本当に生活の中の些細なことなんですけど。例えば、ここの、築田寺の稲荷神社にお参りに来る人たちは、遠く八王子の方から来るぐらい古い神社なんだよとか。初午のお供え物ですごくびっくりしたのが、薬包、昔の納豆は薬に包まれているでしょう？ あれの上にお赤飯と、お団子と、めざしと油揚げを乗せて持ってくるのがここの風習だったの。すごく驚きだったのと、下げてきたとき、ずっと置いておくと汚れてしまうので、檀家さんたちが下げてくれるんだけど、それを捨てるわけにもいかなく、食べなきゃいけない。それで思いついたのが、お団子を油で甘辛く炒めるっていう。それをやったら子供たちがすごく美味しいということ、あつという間になくなって。若いお母さんたちに聞いても、そのことを知らないもので、初午のときにこういうお供え物をするこの地方の古くからの言い伝えということで、小学校へ持っていったこともあります。いまだに、お団子と油揚げというのは続いていきます。ただ容れ物がプラスチックになったけど。薬がなくなっちゃって。10年、15年ぐらい前まではやっていました。

あと食べ物では、里芋のヤツガシラをこの辺の農家さんがいっぱい植えているんです。その茎が捨ててあったんですね。この辺の人はあまり食べないのかな、なんて思っていたら、農家さんだけが食べなかったみたいで。皮を向いて、さっと茹でてあついで内にお酢をかけると、茶色が真っピンクになるんです。今は京都の高級な料亭の一品になってるんだけど。ずいき。それを義母からならって、母が農家さんに出すと、こういう食べ方があったか、こんなの捨ててたんだみたいな。干して煮物にするのは、秋田であったような気がするんだけど。若い頃はあまり食べないわよね。

第七章

馴染んでゆく台所



嫁

、姑のとかはよく覚えてないですけど。そのときどきで、台所には両方立ってたと思いますね。だから、味付けとか、色々あったんじゃないですかね。おばあちゃんのはやっぱり塩っ辛い感じでしたね。母親のは薄味って感じ。おばあちゃんのは、芋の煮ところがしとか、本当に濃い感じですね。でも、どっちもあれですけどね、好きでしたけどね。おばあちゃんのもすごい好きだった。でもなんか、だんだん母親もおばあちゃんの味に似てきたような気がしましたけどね。

竹の子茹でるのが楽しかった記憶があるかな。自分の家の林とかに生えてる竹の子を、自分の家の釜で茹でるんですけど。ぬかを入れて。それが、火を使うから、子供だけど任してくれて、おもしろかったかな。近所の友達とみんなで茹でたり。で最後、竹の子の皮に梅干しを入れて吸うんです。三角形に畳んで、三角形の先から果肉が出てきて、竹の皮の香りと、梅の匂いがある。それで竹の皮が赤く、梅の色で染まってきた。美味しいのかどうかちょっともうわかんないですけど。うちのばあちゃんから教わりましたね。竹の子が生える時期は、去年の梅が漬かったやつが残ってるから、そういうのをざざざーって入れて、入れ替えの時期だったのかもしれないです。

野菜は一通り作ってました。葉物から。もう食べたくない、もういいよっていうくらい。最後の方はもう嫌になってくるんですよ、最初は美味しいんですけど。よく、じゃがいもを蒸してくれたりとか、あと里芋とかを塩で茹でてくれて。普通、友達ん家に遊びに行くと、ポテトチップスが出てくるじゃないですか(笑)。うちなんか、じゃがいも茹でたやつを塩で食べるとかで。みんな美味しいって言うんですけど、でもちよっと憧れましたよね、ポテトチップス。

お

義父さんが色んな野菜作ってて、知らない野菜がいっぱいありましたね。ハヤトウリとか。びっくりしたのは、スーパーの野菜、キャベツとかレタスとかの外の葉っぱ、私はそういうのを結構捨てちゃってたんですけど、そこに栄養があるって言うって、できる限り全てを食べるんですよ。普通ならもういっぱいってしちゃうような葉っぱも、ちゃんと刻んで小っちゃくして。茎にも栄養があるって。そういうのって本当にすごいなって。無駄にしない。やっぱり作ってるから、野菜に対する愛情がすごい。こっちに来なかったら絶対わからなかったです。

第八章
この坂の上から



仁 忠生小学校の周りにもなんにもなかったんだよ、野っぱらで。春になるとヒバリがさ、ピーっとしてな、麦畑の中でさ。

幸夫 なんにもなかったな。

仁 その上登ると富士山の頭だけ見えるんだよな、ちょーつとな。ほんとちょつとだけ白く見えた。

善夫 この辺は山へ登ると、富士山があちこちから見れたよ。

仁 天気がいいとね。

善夫 今はもうビルとかそういうので見えないけど。

幸夫 あと、乗馬センターってあったよな。あそこが一番高いところなんだよ。だから大山から丹沢の方がずっと見えてたんだよ。

仁 春に、相模原の大風が来ると、すごい砂塵が舞ってさ。すごかったよな。あの頃は、ほとんど家がなかったってこともあるな。

幸夫 あと、汽車。

善夫 うん、夜になると音が聞こえた。横浜線かな。カタンカタン、カタンカタンって。よく響いて。

坂

は、坂の思い出っであるような気がする。なんか、単純に自転車を下っていく感じとか、上っていく感じとか。この辺は本当に坂多いので、上ったら下るの上ったら下るの繰り返しなので。暑い夏の日とかにさーって自転車で下っていく感じ。上ったら帰りは下り坂だなんて、楽だなあとか。でも、坂が多いなんて気付いたのは、もっと後ですね。大人になってからかな。相模原行くとほとんど平地なので。平は楽だなみたいな。町田のこの辺は本当に山が多いって、後になって気付きましたね。あんまり考えたことなかったです。逆に平坦なところは、不安っていうか、ふわふわした感じにはなりませんね。自転車とかで走っても、ドラマがないじゃないですけど、アップダウンがないので。身体的にいつても、やっぱり不安定になりますよ。今思うと、景色のいい場所って結構あるんですよ、坂上ったときに。わざわざ上って見渡してみようとか、そういう風に思ったことはないですけど、上に行っ振り返ると、結構上ったなあという感覚はありますよね。やっぱり上ると下ったらどうなっただけで見るじゃないですか。

あの町田自然幼稚園の坂、すごいじゃないですか。あと、幼稚園のちよつと行った坂とかも。恥ずかしいですけど、こう走ってばばばって下りるじゃないですか、勢

いよく。そのままの勢いで家まで行けるかってやってみましたね。ばばばって入ってく感じっていうか、足がそのまま前に出てく感じというか。そういやそういう感じで帰ってたなあ。でもこんなの思い出すことなかったですよ、話さなかったら。

あ

の、当時ではびっくりなんですけど、バス登園だったんですよ。だから、母たちが幼稚園に足を向けるのは、保育参観とかそういうときに、この何もない砂利道をよく歩いた歩いたって言うんです。長靴を持ってきて、ぬかるみで履き替えたって言うてました。母はもう今80歳なんですけど、その頃の話の色々聞いたら、何回も言うんです、歩いていくのが大変だったって。

本当に何もない砂利道で。ちょうど根岸橋ってところがあるんですけど、坂になって上からバスが下りてくるのを私たちが待つような状況で。でもあの頃、同じバス停から5、6人も乗ったんですよ、道路は車が何台か通るくらいなんですけど。待つてるところがね、広い広場だったんです。そこに朝、みんなお母さんに連れられ

て集まりますよね。野原なので、ちょっと草をとったり、たんぼぼを摘んだりとか、そんなことしながら待つてると、向こうからバスが下りてくるのが見えるので、並んで待つて言われて、そこに並んで待つて、バスが停まったら乗っていくみたいな。

その友達とバスを待つてたっていうのが、とっても嬉しかったんですよ。だから本当に、バス停はしっかり覚えてます。すごく楽しい思い出として残ってるんですよ。だから、なんでしよう、バスに乗る先生に憧れて。バスの車内で先生だけが立って乗ってるじゃないですか。だから、私、自分の自家用車、父の車の後ろで立って乗ったりして（笑）。そうそう、そんなことしてましたね。

あ

っちの坂、こっちの坂ってやるよりも、ふくろう坂って勝手に付けて。こっちの坂が男坂、こっちが女坂。私もいつもわからなくなるんですけど、真つすぐが男坂、左が女坂。お稲荷さんのところの坂。行きは男坂で上って、帰りは女坂で下りてくると安産になるって。私もやって、次の日長女が生まれました。安産だった。お寺の近くの方に教えてもらったの。



第九章
この谷の下から

この辺にはお年寄りや子供が多く通ります

生

まれも育ちも働いてるのも忠生です。出たことないです。うちはもう、僕で17代目とかなので、多分。家系図かなんかあるみたいで。後継ぐつていうか、わかんないですけど。あんまり重たく考えてないですけど。うちは農作業とかしてますけど、割とそういうのも嫌いじゃないというか。生業は農業でしたね、ずっと。今も農業ですけど、それで食べていってるわけではないので。昔はその比重がでかかったと思います。じいちゃんは、農業、あと幼稚園の運転手やったりとかしてて、パン屋だったとか言っていましたよ。

小っちゃい頃から農作業をちよこちよこ手伝ってましたね。嫌じゃなかったです。もち米でしたね。お米をやってる家ってあんまりなかったと思うんですけど。やっぱ水がかなり必要だと思っくんですよ、普通のお米は。もち米って、陸稲おかほって、土の上で育てられるお米だったと思うんで。でも多分普通のお米の田んぼもありましたよ。他にもなんでもいっぱいやりました。とうもろこしとか、野菜、いちごとか。うちのおじいちゃんとおばあちゃんと、父親と。姉ちゃんはあるまやらなかったです。おじいちゃんは厳しかった。子供に対しても厳しいです。仕事ができないと普通に怒ります。例えば、稲刈りの仕方とか、荷物の運び方とか。なんでもたつくと、もうちよつとこういう風にやれとか、厳しかったな。

う

ちのお袋は、俺が生まれると体調崩しちゃって、具合悪くなっちゃって。それと同じ時期に仁ちゃんとの姉さんが生まれて、何か月かで亡くなっちゃって。うちのお袋は乳が出ねえ、こっちのお袋は乳が余っちゃって、で俺が乳をご馳走になって育ったって。山羊の乳も混ぜながら飲んで。何しろ高齢出産だったから。45歳のときの子供だから、俺。8人兄弟の最後だから。俺も話に聞いたただだから、覚えてるわけねえからさ。

相

模原の実家を出て、8年ぐらいひとり暮らししてたんですけど、そのとき、町田駅の近く、原町田の方に住んでたので。あつちはマンションが多いですよ、やつぱり。忠生に来たら、本当に自然が豊かだなんていう感じでした。町田もすごい広いっていうのを、住んでみて改めて知ったというか。

忠生に来て、坂道多いなって思いました。そもそも町田って坂道が多いですかね。あつちの原町田の方も、ちよつとずれるともう坂だらけなんです。それでこつち来たたらまた坂が多いなって。ほとんど周りは電動自転車ですもんね。高校生で電動なの

は結構衝撃でしたけど。相模原は結構平坦っていうか、私の実家の近くが本当にあんまり坂がなかったので、余計にこっち来てすごいなって。

馬

のまきば、皇室のまきばがここにあったんじゃないか、そのひとつじゃないかと言われていますね。この谷戸というのが、馬を追い込むのにはちょうどいいでしょ？ 馬まがけ駄とか、馬に関する地名がすごく残っているんですね。

縄文土器は、町田は800カ所以上の遺跡があるから、都内でもかなり大きな遺跡がある場所ですね。しぜんの国保育園の目の前の道が開発されるときには、我々は狸掘りで。食品衛生研究所の開発のときに、竪穴式住居が出てきて、家族の骨が出てきたんですよ。

し

こら辺は、私が来た頃は、縄文土器が出て、主人がちよつといないなと思うところ。そこに一生懸命拾いに行つて、袋とか段ボールいっぱい。まだそこら辺にあるけれども、そういうのを取ってきて。ここが実は山だったんですね。この裏の道もなかったんです。山崎小学校もなかった。そこから土器が出たんですね。それで工事が相当遅れて。そこになぜ道を通したかという、町田市の開発の中の一環に入っていたんです。小学校ができる、そしてそこに道を通すと、日本で初めて自分で設計できるマンション、シーアイハイツができたので、バスが通るようになった。バスに乗るときは、そこまで歩かなきゃいけなくて。スーパ―は山崎団地の中の商店に、自転車の後ろに子供2人乗せて、坂道をよいしょよいしょと行つてました。醤油とか砂糖とかは団地まで買いに行つてましたね。





第十章
流れを変える

仁 とにかく団地ができて変わった。団地ができて、人がぶわあっと入ってきて、我々の、要するに団塊世代は、中学がプレハブだったりとかね、人が増え過ぎて。

善夫 もうあれから50年経つよ。

仁 山崎団地ができて。

幸夫 うん、木曽団地もできて。

仁 木曽団地ができて、鶴川団地も。

幸夫 境川団地ができたときはすごかったよな、同級生が増えて。

仁 町田市になるときにね、小学校4年生だったかな。

善夫 昭和33年だよ、町田市になったのが。

仁 当時人口が4万いってなかったんじゃないの。それが、10倍の40何万人になっちゃったんだからな。

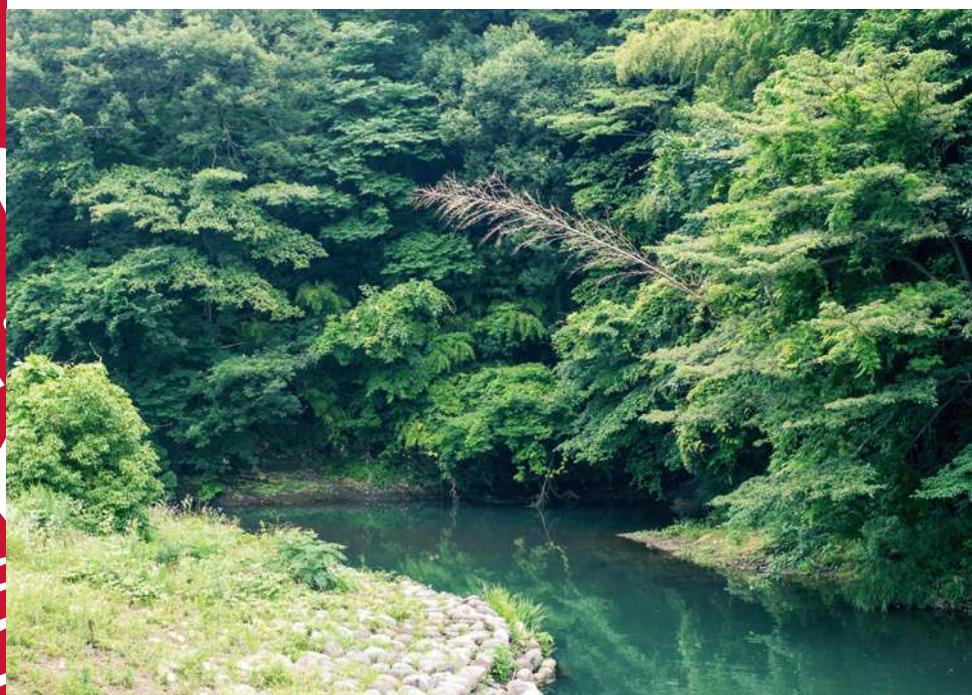
善夫 今は43万ぐらいだよ。50年ぐらい前はもうすごかった。道路も良くなるし、道路はいっぱいできるし。

幸夫 結局ここがだんだん発展してきたんで、農地が売れてね。それでやっぱり生活が変わったのかな。農家の人も農地を売却して、家を建て直したり。それから人が増えてきたんで、貸家を作ったり。そういう方向で、農地が減ってっちゃう、今もそう

だけど。あの頃からずーっとだんだん。でも寂しいような気持ちはなかったね。どんどん発展していくんで。その田んぼが売却されると、そういう金が入ってくるわけだよ。まあうちの親の代だけど。そういう金で若干生活が潤ってきたっていうのが正直なところだな。それまで自給自足みたいだったが、今でも覚えているけど、洗濯機なんか買ってね、テレビも買ったたり、そういう生活ができてきて。どんどんどんどんそういう人が増えてくる。農家を持つてる土地が、住宅地になってくわけだから。そういう中で生きてきたから、みんな。働かなくていい所得が少しずつ出てきた。だから農業所得だけで生活してたっていうのは何軒もないよね。まあ一番の原因は、団地だよ。開発されて人が増える、するとお店も増える、学校もいっぱいできる。我々団塊世代、戦後の昭和20年代前半生まれの俺たちがもう70歳過ぎているなくなってくると、今度はどんどん家が余ってくると思うよ。

善夫 でもまだ増えるけどね。

こ築田寺の、谷戸の形になって
いる水の通りに池があったんで
すよ。自然にできたような池で。それ
で、その辺りから絞り出てきた水を利用
して、井戸をみんな掘って、釣瓶
井戸があつて、みんな湧き水を飲んで
たんですよ。でも、この上に住宅が
できて、工事やったら、井戸が枯れた
り影響が出て。検査をしなきゃいけな
くなったら飲み水に適さないってこと
になっちゃって。それまでは自然に湧
き水だったんですよ。パチンコ屋さん
がある斜め向かいの方では、まだ出て
ますけどね。当時洗濯なんかは、鶴見
川の支流があつて、そこへ行ってたら
しいですね。



ある視点1

それもちょっと皮肉が起きるのは、戦後の食糧不足の時期に、食糧増産を目的にして用水路がいっぱい作られるんですね。井の花堰はなせきというのが、鶴川駅から芝溝街道を西に向かつて自由民権資料館のほうに行くのと、途中、小野路に行く道とY字路で分かれるところがあるんですね。あれを右にしばらく行くと、井の花という地域に行くんですけども、その井の花の小野路側に切られた堰があるんです。そこで切られた堰から大蔵用水という用水路を引いて、大蔵と、それからさらにその下の能ヶ谷の田んぼをその用水で潤かみしているという目的で灌漑かんがい工事が戦後、昭和20年代に行われて終了しているんですね。その井の花堰には工事の記念碑みたいなものがありますけども、それがなんと皮肉なことに、その用水路ができて間もなく、住宅地化が始まって田んぼがどんどん売られていくと。本来、農地改革で小作農民が得た土地というのはそう簡単に売れなかったんだけど、売ることができない制約がかかっているんだけど、それもやっぱりいろいろな抜け道があつて、どんどん水田が売られていったんです。これからその農業用水を使って食糧増産というタイミングで高度成長期にかかったんで、稲作よりも土地を売って宅地化ということになつたという、あそこはとも皮肉なあれになっていますね。それは用水の話ですけども、谷戸とか用水とか田んぼとかつていうことに注目をすると、やっぱり高度成長期というのがひとつのターニングポイントとしてあるんだなというのは見えてきたりしますよね。

第十一章
新しい人たち



主

人も私も生まれは新潟なんです。職場は別で、お見合いで。私は北千住の蕎麦屋で働いていて、主人は八王子の台町、同じ蕎麦屋で働いていて。業者さんが、あそこにこういう人がいるよっていう紹介で。昔はあれですよ、集団就職とかそういう時代でしたけども、私は母に連れられて北千住で働いて。そこで7年間修行して、それで主人は集団就職で東京に来て、八王子で10年8カ月働いて。高校にあげてもらえるほど、お金もないですよ。高校に行きたくても、親がそんなにお金持ちでもないし。結局私が子供の頃は人数が多かったから。私は、7人兄弟の一番上が亡くなって6人でしたけど、高校に行ったのは一番下だけですよ、男の子だけ。一番下に男の子生まれましたから、その子だけは可愛がられて。やっぱりね、百姓をやってますから、男の子は欲しいですよ。親同士がもう競争で、何人男の子できるかみたいな感じですよ。だから他はみんな、中学校卒業して出ていくんですよ。

だから本当に、知らないところへ連れて行かれて働かなきゃいけないですよ。寒いときに来ましたから、ストーブの時代でしたよね。それで涙を乾かして(笑)。親に置いていかれますからね、やっぱり切ないですもんね、15歳ぐらいで。わかっててもね、やっぱりね、寂しかったですよ。大きなお蕎麦屋さんでしたけど。昔、ビアホールなんかがあって、2階もあって、大きなお蕎麦屋さんでしたね。

竹夫

この場所は探したんです、私ひとり。オートバイで。本当は八王子でやりたかったんだけど、八王子はなくて。それで、相模原探してなくて、それで町田来て。たまたまこういう場所ですから。

まり子 前は原っぱ、忠生小まで。本当に細い1本道、原っぱですよ。うちもこの辺も全部原っぱで、ヒバリの巣があったくらいですから、その辺に。昭和48年に、最初のこの店、最初の店舗ですよ。55年に、増築をして、でまた11年後にこの建物に、昭和60年にこの建物に。周りにもお蕎麦屋さんがありましたね。ある日私が肉を買いに行ったとき、そこで「潰さないように頑張れよ」って言われたり。

竹夫

当時はね、色んなこと言われましたよ。別にここがいいなって思ったわけではなくて。

まり子

早く出たい。働いてるところから早く出たいって。

竹夫

とにかく八王子を早く出たいから。ただ昔は配達が専門だったから、配達にはやっぱり自信があった。だから場所はどこでもいいんですよ。そうそう。とにかく早く出ることしか考えてなかった。

まり子

それで、昭和48年の9月1日に私はこっちへ。もう建物だけはできて、水とガスがまだで。それから、ふたりがここに来て一緒にになった。結婚式が9月の6

日、9月の14日が開店なんです。そう、その間に新婚旅行に1泊行ってる、両方の親をここに置いて(笑)。

竹夫 湯河原に。

まり子 湯河原か。

竹夫 そうそう、そのままね。ただ困ったことがひとつあってね。結婚式のときに、費用は折半だという話だったの。ところが式が終わってみたら、こっちの方が金を出さないって。

まり子 親じゃなくって、働いてた蕎麦屋の主人が出してくれる予定だったの。でも、筭筒一式は買ってくれたのでね。それでいいことになったのかもしれないです。

竹夫 一番困ったのは、金持ってってない。元々ないんだから。出さないって言われたから、出さざるをえないですよ。でも今度は、新婚旅行に行けないわけ。金がないから。ところがやっぱみんなが東京駅まで送ってくれるから。一応、行ってくるとして出ていかなきゃいけない。ところが出てったはいいけど金がないから、結局しょうがない。兄貴に金貸してくれない？って。で、兄貴から金借りて。

まり子 3万ぐらい借りたかね？

竹夫 3万、うん。あれには困りましたね。

今

は忠生じゃん。前は根岸の交差点にあっただよ。あそこの農協は、昭和45年の12月に建ったの。その3階で結婚式場を始めたわけよ。住職は、そこで結婚式やったんだよな。俺は総務課だったけど、担当で。だから、結婚式の司会して。

「只今より祝詞奏上」とかき、指輪の交換とやって。机並べてさ、全部職員がやる。それが終わると今度は、急いで蝶ネクタイつけて、お蕎麦を出したりさ。お腕配ってたらさ、ばってぶつかってじゃーってかかっちゃって。それで怒られてよお、平謝りで謝って。

それからね、あともう1個がね、キャンドルサービスっていうのがあったんだよ。それで、天井低くって、エアコンつけてるもんだから、昔は今みたいに良いエアコンじゃねえから、風が吹くんだよ、びゅーびゅーびゅーびゅー。ほんで、ジャンジャジャジャンってふたりでキャンドルつけるんだよ。でもつけるとぼつと消えちゃうんだよ(笑)。ほんでその後さ、しょうがねえ、マッチでつけてやるんだよ。その後で披露宴になったときに、怒られてよお。まあ俺下っ端だったから。親父、親戚のおじさんみたいなのがえらく怒っちゃってよ、「責任者のやつ呼んでこい！」つつうんだよ。「じゃあわかりました」つつてよ、俺下行ったんだ。そしたら課長も参事もいる

んだけどよ、「何とかやってこい」つつうんだよ。やんなっちゃってよお。「今、あいにく出払っちゃってて、申し訳ありません」ってよお、土下座して謝って俺。それからまた今度は、それで終わらんと、精算して金払いに来るんだよ。そんなときもまたえらい怒られてよお。エアコンの風が吹くから消えちゃうんだよな。ほとほと消えちゃうんだよ、風吹くたんびに（笑）。だからそれから頭使ってよ、キャンドルサービスのときは、エアコン切っちゃうんだよ。

まり子 私の働いていたところは、大きなお蕎麦屋さんでしたら、出前待ちの男の子が五人ぐらいいるわけですよ。配達は必ず自転車ですから、バケツに水を入れてそれをお盆にのせて、担ぐ練習をさせられる。こぼさないように、倒れないように。片手で練習させられるの。

竹夫 最初は、ひっくり返しましたよ。

まり子 怪我をしたりね。男の人は大変でしたよね。私たちはお店の方だからいいんですけど。難しいですよ、バランスを取りながら。

竹夫 平屋が多かったんですよ。だから電線が低いんですよ。だから夜うっかり行くと、その電線に引っかっちゃうわけ。

まり子 今みたいなラップがないんです。だから木の蓋を被せて。そういう時代でしたからね。

竹夫 わかってても、やっぱりうっかり通っちゃうよね。それでみんなひっくり返って。地震よりすごい音がするんですから。落としたら全滅ですよ。20、30持っていていても。だから近所の人は何事かと思って飛び出してきた（笑）。片付けるのに、バケツもひとつやふたつじゃ間に合わない。

まり子 作り直して持ってかなきゃいけないですからね、つらいですよ。帰れば叱られるっていうね。

竹夫 叱られるんじゃないかって、もう竹の棒持ってますからね。俺だけ叩かれた。でも間に合わせないといけない。昔は特段に忙しくて、ひとり120軒から130軒運ばないといけない。だから歩いて配達したことがない。全力で走った。でなきゃ間に合わない。それじゃなきゃできない。1軒出したら2軒下げてこないよ。だからどうしても、急いじやあって、焦ってつい忘れちゃう。一番ひどいときは、大盛りそばを34個持ってたんだだけ。そうすると電線に近いんですよ。3、

4 mぐらいになるかな、うちに入れないんですよ、下へ降ろさないよ。

まり子 片手でね。

竹夫 うん。

まり子 自転車の後は、50ccのバイクになったんですよね。

竹夫 だから6、7年は自転車でしたね。一番多いときは、9段積んだから、もっと高い。だから外国人がね、写真を撮りに来るわけですよ。自慢になって、また積んじやうんですよ(笑)。だから降りるとき、うちの中に入るとき、大変なんです。

まり子 この人ひとりでしたからね。私のところは5人ぐらいいましたから。

竹夫 そうそう。今は違反になりますからね、片手運転は。昔はオートバイに色んなもの積んで、また手にも5段ぐらい積んで。まあとにかく虫ばかりで。走ってれば目の中みんな飛び込むし、蛇はいるし。

まり子 ここにきて3年後ぐらいからぼつぼつと、もっと後かな、原っぱらに一軒家が建ち始めた。前はね、桑の畑でしたけどね。町田は蚕の町だからね。それでだんだん整地みたいなが始まってきて、早かったですよね、建ち始めたからね。

竹夫 そうそうそう、忙しくなった。パートさんは多いときは7人いたのかな。お店のお客さんが、最初の頃は6割が職人さんだった。サラリーマンが2パーセント。

まり子 結構タクシ一の運転手さんが多かったね。

竹夫 コップ酒飲んでた人もいたけどね。休憩中に、コップ酒(笑)。

まり子 コップに酒入れてって。で、しばらく寝て。ここ畳の部屋でしたから。

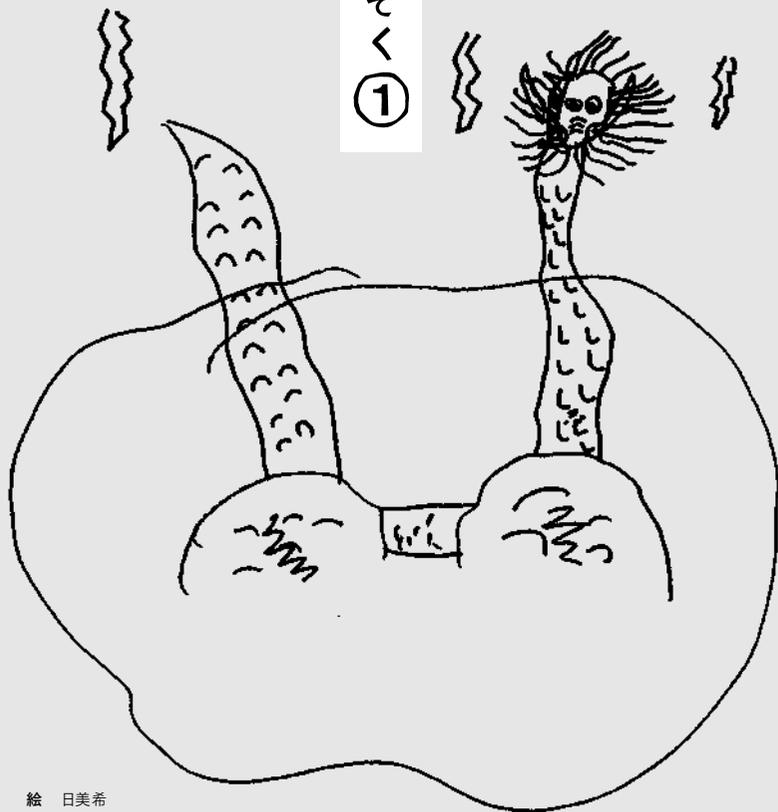
竹夫 大工さんから左官屋さんから色々ありますよね、ほとんど職人さん。家が建ち始めてそれで、遠方から来てくれたからね。職人さんに合わせて、ちょっと辛くして。汗かくし。でも今は汁も一切変えてないけど、まだ辛口けどね。最初から最後まで味が変わらないってこと。

本

当に色んな方が来ていて、ある日ご一家が入園してきて、お母さんがいなく、お父さんが5、6人の子供を育てていて。お父さんは香具師^{かぐし}、お祭りのときに色んなものを売る人で、歩き方もいかにもお父さんで。ある日その方がなにか文句を言ったものだから、先生たちがブルブル震えて、私も足はガクガクしてたんだけど、「お父さん、そんな風に子供を玄關で叱ってはいけません」って言ったわけ。丁寧に言ったらそれなりに納得してくれて。その辺から変わって、お祭りで売れ残っ

たものをみんな持つてくるんですよ。あるときはウズラ。何十匹もウズラを。どんどん潰れて毎日死んでいくの……。そんなウズラを持つてきたり、あるときはブリキ缶いっぱいにはスプーンとかフォークが詰まったものを、これ使ってくださいって。でも返すと怖いから。本当に十数年もそれが。金魚だったり、水飴だったり。いらぬとは言えないのよね。

やとのかんそく ①



絵 日美希



バイクのハンドルは握るだけではない。色々干せる。走りながら干すことで、乾きを促進させてここに到着した可能性すらある。山崎団地にて。



斜面が崩れないように、この家のご主人が少しずつ補強しているという。ブリューゲルのパベルの塔のようで圧巻の景観。

忠生周辺の住宅街をてくてく歩いてみると、思わず立ち止まってしまふ個性あふれるものに出会います。ここではそんな奇妙で愛らしいものをまとめてご報告します。

結界のように、アパートを侵入者から守るコーラやファンタにアクエリアス。秋田の竿頭のような素晴らしい作品も。山崎町第2アパートにて。



雨の日も屋根の上で楽しく歌うのは、トランペット奏者ルイ・アームストロングだろうか。What a wonderful house.

さながらF1カーのように、たかさんのスポンサーに支えられたバス停。二大看板は町田市忠生農業協同組合と、宝堂製菓。

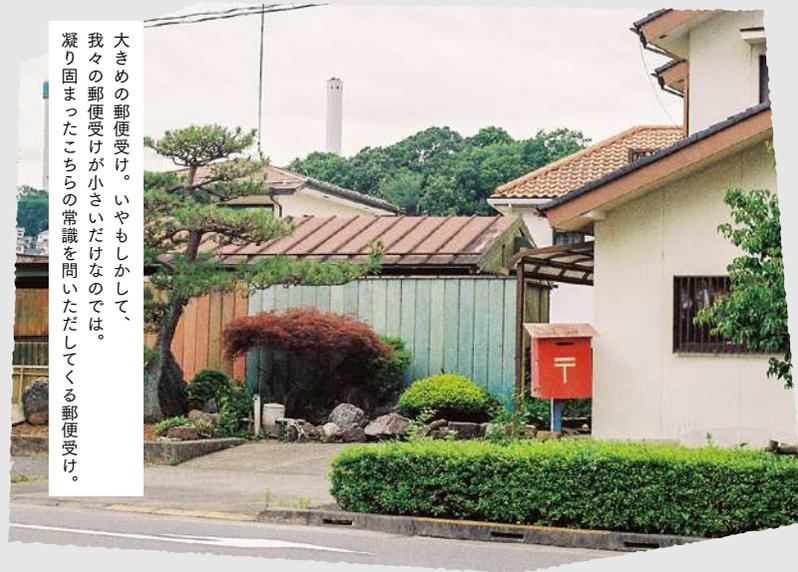


パイロンの在り方。

その1、手を取り合って御神木を守り抜く、パイロンたちの決意と団結力。
その2、パイロンとDIYされたブランコの並置がアーティスティック。



大きめの郵便受け。いやもしかして、
我々の郵便受けが小さいだけなのは、
凝り固まったこちらの常識を問いただしてくる郵便受け。



貸し傘ボックスだろうか。それとも他の用途だった箱に
傘が置かれていった結果、貸し傘ボックスへと
なっていくのだろうか。鶴見川沿いにて。



徹底的なる伐採、でも美味しそうでもある。鶴見川沿いにて。



リトル・クリーチャーズ編

散策していると、道端にひょこっと妖精が現れるときがあります。
クリーチャー
 そんな夢のような瞬間をどうぞ。



これはリトルではなく、懐に4人も子供たちを抱えられる、
 頼もしいビッグ・ダディ・クリーチャー。



少し離れて警戒ぎみにこちらの様子を伺っている、
 控え目な妖精。おちよぼ口がなんとも愛らしい。



こっそり控えめに出迎えてくれたのは、
 たんぼの精に違いない。
 わざわざ誰かが目と鼻を付けたのか、
 それとも自然のいたずらか。



鶴見川の葦の中で、あの有名な
 クリーチャーの巣を発見。
 ひっそり卵を温めている最中だった。



草陰からひっそり見守る
 路傍の石タイプの、
 カオナシ・クリーチャー。
 この界隈の最長老かと思われる。



【人口推移】

昭和33年：13,524世帯 人口63,051人
昭和43年：46,688世帯 人口154,463人
昭和47年：70,513世帯 人口228,723人

『町田市史』より抜粋

ある視点2

首都圏整備法というのがある、相模原は工業地、町田は商業地、という役割分担がひとつのきっかけにはなっているのですが、町田も市として、財政を成り立たせるために、工場誘致をするんですね。でも坂が多い町田はあまり成功しないんです。誘致するための平地は、相模原のほうが圧倒的に多いんです。今も相模原のほうに工業団地がありますよね。そうすると、町田市はどこから税金を求めるとなる。そこで、昭和30年代の半ばぐらいに、住宅、要するに人口を増やすことで税金を増やすというほうにかじを切っていくんです。それで、鶴川団地をはじめ木曽団地とか、団地をどんどん誘致し始めて、ああいう巨大団地ができていく。そうすると地価も上がるから、工場誘致はさらに思うように進まない。それで、あっという間に団地の町田になって、人口がうなぎ登りになっていくんです。

でも、無計画に団地誘致をやってしまったから、学校とか水道とかのインフラの整備が追いつかなくなってパンクしちゃう時期があって、団地が陸の孤島になっちゃったんですね。鶴川団地も建設過程では、まさにそこにあつた谷戸が全部埋められて作られていった。町田の団地造成というのはどうもそういう背景があって、税金が工業誘致では難しかった分、人口増によってまかなうと。それは当たると成功するんだけど、インフラ整備にお金を割かなきゃならなくなっていくという反省が生まれて。そのとき以来、団地誘致を逆に抑制していく形になったんですね。あの辺の人口増と団地問題の発生の背景にはそういう流れがあったみたいですね。





縁はどこへ行った

第十二章

こ の地域独特かどうかわからないけど、すごく衝撃的だったことは、人が亡くなったときにみんなが集まって、みんなで亡くなった方を拭くんです。ひとりずつに布を渡されて、全部拭いて、どこかしか必ず拭いて、みんなの前で白い装束を着せて、わらじを履かせて。全部旅支度をさせて。映画みたいだけど、三角の布を付けて、笠とかそういうものを全部そろえて。そういう風習があるんです。ご近所に詳しい人がいて。実際その人を送るとき、私もそういう風に見送りました。

い やあ、葬式も、近年、20年前頃から変わってきたわけだよ、どんどん。家からお棺出してた。お弔いだって、みんな家でやってね。全部家ですべて普通だったもん。続きの間って、八畳二間とか、六畳八畳ってみんな作ったんだよ、人寄せができるように。今はもう、部屋がみんな分かれちゃってるからできない。八畳通しでぶっこ抜けば、何十人って集まれた、人寄せができた。

そんでみんなで色紙で作ってお棺に貼ったり、銀紙でワニの口作って。木の棒の先

に、キラキラしたやつ作って持って歩いたの。あと俺ら墓穴掘ってたんだよ。穴掘り当番ってね、村で決めてあった順番で。Aさんとこで今年やったから、来年はBさんだとかって決まっていた。帳面があつて。穴掘りの人は優遇されてな、お葬式が終わったら、一番風呂に入って、上座に座ってごちそうを食べる。そう順番にみんな村でやるんだよ。

そ うね、うろろろ散歩しながらだったんだけど、もうひとつ。その前に、築田寺の山門の前に、縁切り不動っていうお不動さんがあって、実はそれは、近く場所から移動してきてるんですけど、そこには悲恋の物語があつて、石の看板に歴史が書いてありますけど。道の上下の家の男女が恋に落ちて、別れなさいって言われた。だからそこを通っちゃだめっていう。その道を通ると縁が切れるの。逆に縁を切りたい人はそこを通るといのが書いてありますよ、悪縁とか、ギャンブルとか、断ち切りたい人。この縁切り不動は、日常の中でそこを通る通らないという意識が、地域の方々の間でかなり浸透していて。凶師に行く前の道のところ。川に身を投げたと

か、川にいわれがあつて。でも私はその物語があんまり好きじゃないからよく見てないんだけど。1回知ってしまったら、ね。人間のそこいらへんの心理ってすごいですよ。

もうすつごい寂しかったのよ、もともとあつたあそこは。今はお家が建つてて、なんにもなかったことみたいになつてるけど、本当に寂しいところだった。看板は築田寺で作ったの。お地藏さん、縁切り不動も朽ちてきているけど。でもみんな心のどこかに災いを背負いたくないから、そこをなくす工事するときも、近所の人たちみんなが集まって、うちでお経を上げて、それぐらい。ただの石なんだけど、村人にとつてはされど石で。もうそこにはなにもないから、会話にも出さないかな。そこにお家が建つちやつてるからね。私たちの年代だと、あそこはあんまり通つちやだめよみたいなね。特に嫁入りのときは、近代まで避ける風習があつたの。

やっぱりなにかを「置く」つていうのは、ひとつの物語があつて置く。その人の思ひだけで置いても、それを今度はお邪魔だからどけるつていうことへの恐怖は、人間の心理の中に絶対あるので、よくお庭に狐の鳥居があつたりとか、色々なものを祀つてあつたりすると、それを動かすのは至難の技だよ。

仁 ごんべんの「講」つて書いて、この辺では講中つて言つて、地域で講を組んで参拜

するんだよ。うちは大山講おほやまだったんだけど、大山は、雨降山あめふりやまとつてね、阿夫利あぶり神社から人が来て。そういう伝道師のことを御師おしつて言つて、こつちに来ると泊まる家があつたの。大山講の場合、暮れになると御師がお札の注文を取りに来るんだよ。それで正月にまた来て泊まつて、お札を配布する。俺が子供のときは、家に御師が泊まりに来てたね。

幸夫 うん、うちは御岳講みたけだったな。五穀豊穡の神様。昔は農村だから、農業の神様を地域で信仰してたんだよ。

仁 よつちゃんのとこなんか、御岳から来た御師が泊まつたんじゃないの？

幸夫 そう、この辺は御岳講が多かつたよ。阿夫利神社の方も何軒かいるんだけど。御岳講は、山崎で何軒か泊まるところがあつて、御師が順番に泊まる。それで、近所を回つて、お米もらつたりお金を集めたりして、お札を配る。それで山へ帰るわけだよ。上山崎でも3軒、宿をやる家が決まつてて、その内の1軒がうちで。だから親父のときからずっと、何年かにいっぺんは宿をやって。御師さんが来ると、1泊してもらつて、食事を用意して、まあ一杯飲んでもらうわけ。御師さんは酒が強い人が多くてね。うちに泊まると、踊り踊つてさ。それで帰りに神棚に7000円置いてくんだ

よ、宿泊料を。御岳講は今も暮れに通知が来て、1月の4日に御師さんが来るよ。
善夫 今は車社会だからその日に帰られるけど、遠いから昔はこっちに泊まって。

仁 大山講の方はね、だんだん少なくなっちゃったんだけど、私が回って、お札のとりまどめをしているの。あるときまでは御師さんが来てたんだよ。ところが御師さんが来なくなったからさ、郵送でやっているの。俺が全部まとめてんの。

善夫 そりゃ大変だな。あと、農家の神様だから、みんなでお金を出し合って、何年かに1度参るんだよ。俺も行った。講中の人たちと御岳に行って、太々神楽を奉納する。舞台で特別に舞ってくれるんだよ。それで、1升、2升餅ついて持っていくんだよな。それで、あっちで五円玉と一緒に撒くんだよ。

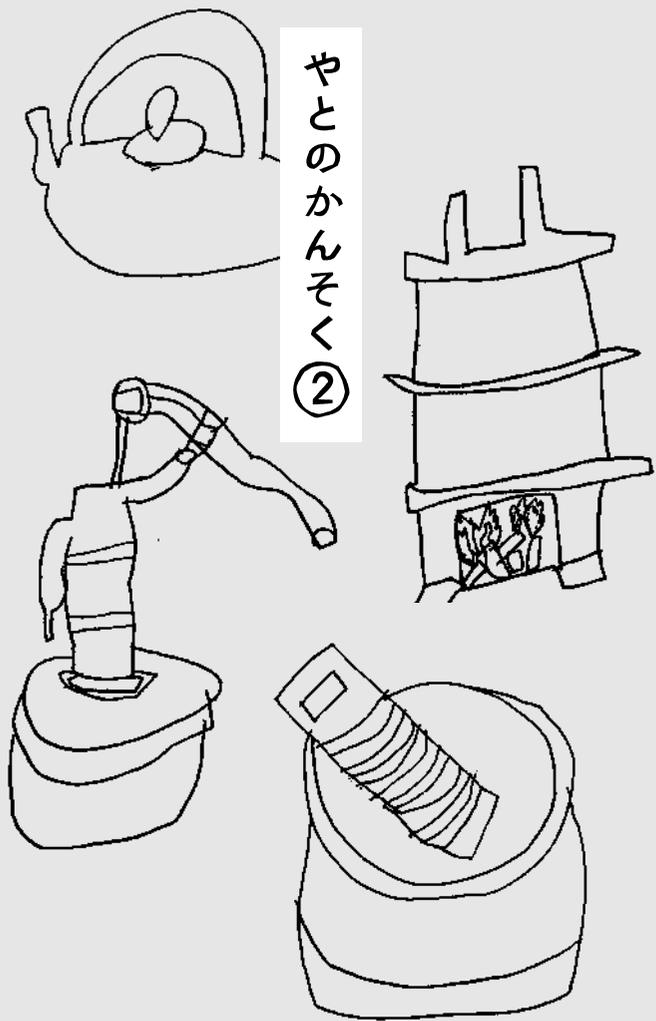
善夫 近年までそういうのがあったんだよ。今は有志だけでやってる。結局、農家が少なくなっちゃったんだよ。

仁 要するに、農業っていうのは、ひとりではなかなかできない、共同作業なんだよね。機械も共同で買ったり、そうやってみんなでやっていたんだよ。

善夫 これから次の代になると尚更だろうけど、そういう意味で、我々の代になって来たところで、解散した。みんなやってたんだけど、そういう人がバラバラになって、自由に信仰するようになっていったのかな。



やとのかんそく②



絵 ひなた



裏山の中腹に小さく赤い物が見える。
よく見ると、お稲荷さんにとどり着くまでの
道も赤い手すりが付けられている。



図師大橋付近のお稲荷さん。昔ここが
宿屋だった時代の名残りだそう。



こちらは民家ではなく、図師の駐車場の
片隅で静かにたたずむお稲荷さん。

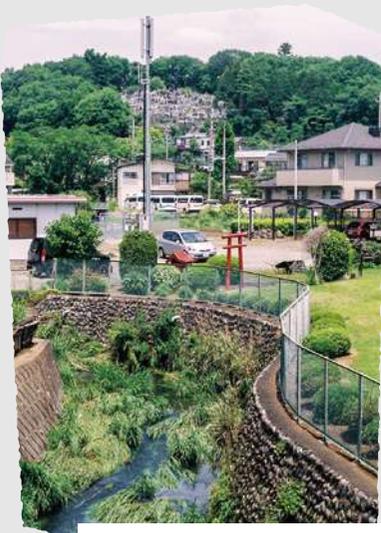


こちらはプライベートではなく、
鳥居もあります。
街の辻にそっとたたずむお稲荷さん。
野に咲く花が供花のよう。



出会った中で最も赤く、
最も立派だったお稲荷さん。
洗濯物とシンメトリーの
構図がきまっている。

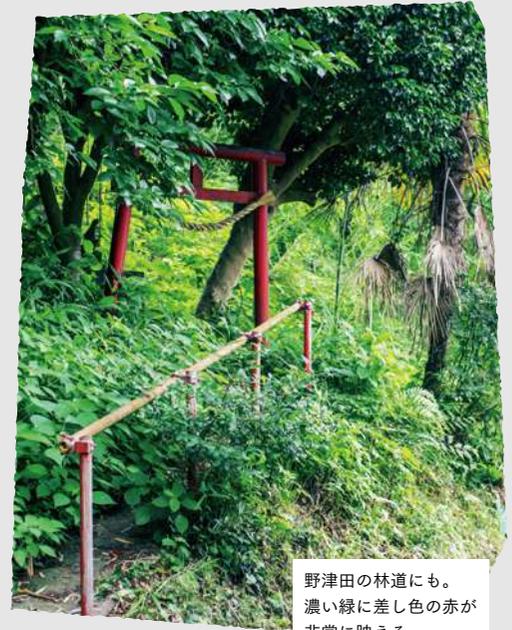
プライベート稲荷編
忠生とその周辺では、ペンキが塗られたのにきれいな
鳥居をよく見かけます。そのほとんどが、
個人の家にあるお稲荷さん。商売繁盛を祈願したものでしょうか、
それとも屋敷神でしょうか。



川の曲線と鳥居の直線の対比がなんとも美しい景観。奥には墓地の借景も。



ここにもプライベート稲荷が、と思ってパチリとシャッターを切ると、惜しくも微妙に違う。



野津田の林道にも。濃い緑に差し色の赤が非常に映える。



こちらはオフィシャルな鳥居。浅間神社の、珍しいゲート付鳥居。色のチョイスがナイス。



ここは他と違い、ちゃんとしめ縄飾りもついている。

第十三章
光の池



神

社の横に、ハリギリの木、子供が囲んだら10人ぐらいかな、千年ぐらい立っているハリギリの木があつて。桐の木なので、柔らかいですよ。東京都の天然記念物に指定されていて。一部が枯れかかったときには、東京都から樹医さん、木のお医者さんが来て、色々と手を尽くしてくれたんだけど、落雷にあつて、倒れてしまつて。それまでは、木と木の分かれる間ところが洞になつて、そこが多分柔らかいので、フクロウさんが住み良いお家を作つていて。ずいぶんいたんだけど、木が倒れてしまつて。あれはね、本当にあの木は惜しかった。ハリギリの木。本当にかわいいんだから。ぬいぐるみをチョンと木の上に置いたような。

ある日ね、5月5日だったかな、連休の日にお客さんを築田寺で案内して、「ここが稲荷神社ですよ」つて言ったら、「あれはなんだ？」つて。神社の横にかわいいのがあつて。ぬいぐるみをあんなところに置いてないよなつて、移動して見てみると、首がぐるつと360度回つて。それがフクロウだったんです。

それからがもう、毎年毎年大騒ぎ。5月5日のこの日あたりは、フクロウが巣立つ時期なので。ギャアギャアつて声をするんだけど、それからだんだんビチュウビチュウつていう音になつて、それでホーホーつてなるのよね。鳴き方が色々あつて。

ここは谷戸でしょ？ 谷の間は、飛行の練習するのにちょうどいい距離なのよね。そこをカラスがねらつて、目を突つつくんですよ。だから倒れちゃう子がいて。3匹生まれたら必ず1匹はやられちゃう。生まれてしばらくすると、裏山のしぜんの国保育園の園庭を飛び回っていた雛が、カラスにやられているのを、園児のお父さんが見つけて。かろうじて生きていたので、野津田の動物病院に連れて行つたんです。ただ、生き餌なのね、フクロウつて。生きた餌しかだめなのよね。だから毎日毎日生きたネズミとかをあげて。でも野生だから体力尽きて死んじゃいました。それも剥製にして残ってるんだけど。

でもね、10年くらい前から、フクロウが戻ってきてくれたんです。ここを故郷だと思つてくれているのかもしれないです。昨日の夜も月が綺麗だったから、ホーホーと鳴いていましたよ。フクロウは、月が綺麗なときに来ると。この空の上から見て、光る池があると、ちゃんと戻つて来るんだよね。フクロウの目線で。



撮影:2021年(令和3年)

おわりに

谷状の地形から水が集まる地であった谷戸は、稲作に適した場所でもありました。しかし、三方を森林で囲まれているため日当たりが悪く、定期的に木を伐採し、草を刈り、また背丈の低い茅を育てるなど、日照時間を長くする工夫が必要でした。このように、集落に暮らす人たちが共同で管理する場所を入会地（いりあいち）と呼び、必要な資源を共に使う生活がありました。

その後、明治6年の地租改正によって、土地に「私有」という考えが生まれ、土や山は「土地」となり、誰かのものになっていきます。そして「私有」の反対の意として、「共有」という言葉が生まれたと言います。しかし、「共有」という言葉が生まれても、それ以前からずっと存在してきた営みを、今の私たちが本当に理解することは難しいのかもしれない。私たちのプロジェクト名にある「common」は、「共有の」「共同の」という意味を持ちますが、これも同じように、言葉だけで理解しようとする、多くのものが置き去りになってしまいます。

私たちは、「500年続く」ものやこと、「common」とはなにかを探りながら、聞き書きを進めてきました。お話のなかには、私たちの理解や想像が及ばないこともあり、なにかをつかもうとするとこぼれ落ちていくような時間でもありました。そして、これまで当たり前だと思っていたことが疑われ、今いるこの場所が揺さぶられるという体験は、語られた言葉の奥に人の営みがあるということを強く実感させるものでした。

「500年続くcommonを考える」という、この先も続く長い年月に意識を置くことは、これまで続いてきた長い年月に意識を置くことでもあります。この『郷土詩』が、私たちの生きる現在地から、長く伸びる過去と未来を想像するきっかけになれば幸いです。



- 語り手** 阿部 竹夫、阿部 まり子、齋藤 謹也、齋藤 美智子、杉山 弘、鈴木 幸夫、長澤 善夫、早川 朝子、牧野 仁、牧野 朝輝、牧野 真純、柚木 當子
- 企画・写真** 波田野 州平
- 企画・編集** 森 若奈
- 文字起こし** 根間 美砂子
- デザイン** 根岸 篤男
- 制作** 500年のcommonを考えるプロジェクト「YATO」
<https://yato500.net>
- 発行日** 2022年3月21日
- 発行元** 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス8階
TEL 03-6256-8430 FAX 03-6256-8827
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>
- 印刷** 株式会社 サンニチ印刷
- 主催** 東京都
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
社会福祉法人東香会
- 問い合わせ** 社会福祉法人東香会
〒194-0035 東京都町田市忠生2-15-64
TEL / FAX 042-794-6675
<https://toukoukai.org>

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

ISBN978-4-909894-29-8 C0070



